

# 知的ギフテッドの Overexcitability 特性を 評価する心理尺度の開発

— Overexcitability Questionnaire-Two 日本語版の試作 —

日高 茂暢<sup>1</sup>, 富永 大悟<sup>2</sup>, 片桐 正敏<sup>3</sup>, 小泉 雅彦<sup>4</sup>, 室橋 春光<sup>5</sup>

Development of the Psychological Scale to Assess Overexcitability of Intellectually Gifted: The Overexcitability Questionnaire-Two in Japanese Prototype Versions.

Motonobu HIDAKA, Daigo TOMINAGA, Masatoshi KATAGIRI,  
Masahiko KOIZUMI, and Harumitsu MUROHASHI

## 要 旨

高い知的能力を示す人(知的ギフテッド)は、刺激に対する高い感受性と強い反応である Overexcitability (OE) を示す場合が多い。本研究では OE を評価する心理尺度 Overexcitability Questionnaire-Two (OEQ-II, Falk et al., 1999) の日本語版を試作した。本調査には知的ギフテッドに限定せず大学生150名を対象にした。OEQ-II 日本語版では精神運動性 OE, 感覚性 OE, 想像性 OE, 知性 OE, 情動性 OE の5因子間全てに相関が見られた。また知的ギフテッドを対象にした原版と比較し5因子全てで有意に低得点となった。主成分分析の結果、先行研究と同様の5成分に情報を要約することができた。また探索的因子分析の結果、知性 OE, 精神運動性 OE, 感覚性 OE の3因子構造が得られた。本研究の結果から① OEQ-II 日本語版でも原版と同様に5つの OE を評価可能であること, ② 知的ギフテッドと比べ低得点ながら非知的ギフテッドも OE を示すこと, ③ OEQ-II 日本語版では OE を想像性 OE が代表する可能性があること, ④ 非知的ギフテッドでは知性 OE, 精神運動性 OE, 感覚性 OE の3因子が安定していることが分かった。OEQ-II 日本語版の開発と刺激に対する感受性に対する定型反応を明らかにすることで、知的ギフテッドの OE に関する研究や支援が促進されることが考えられる。

【キーワード】知的ギフテッド, Overexcitability, 心理アセスメント, Overexcitability Questionnaire-Two (OEQ-II)

<sup>1</sup> 佐賀大学 教育学部 幼小連携教育コース hmoto@cc.saga-u.ac.jp

<sup>2</sup> 山梨学院大学 経営学部

<sup>3</sup> 北海道教育大学 教育学部

<sup>4</sup> Gifted・LD 発達援助センター

<sup>5</sup> 札幌学院大学 心理学部

## I. 問 題

知的ギフテッドとは 神経発達症（発達障害）の特別な教育的ニーズの理解が広がるなか、日本でも神経発達症の障害特性と才能を併せ持つ2Eのある子ども（twice-exceptional, 二重に特別な支援を要する）の存在が知られるようになってきた（松村, 2007; 小泉, 2014, 2016）。そして2Eの理解に合わせて、障害特性だけでなく才能に着目した才能の理解、才能教育に関して研究が進められてきた（松村, 2018）。しかしながら、日本では才能による特別な教育的ニーズに応える才能教育が、エリート教育と混同され批判されてきた歴史的経緯があるため（山内, 2012; 松本・是永, 2015a）、才能や才能教育に関する議論は十分に進んでいない。

giftednessやtalent, いわゆる才能と称されるものの概念は、様々な理論が提唱されている（Sternberg, 2004, 2018）。才能教育領域ではRenzulliの才能の三輪概念（Three-Ring Conception of Giftedness, Renzulli & Reis, 2018）がある。Renzulliのモデルでは、優れた知能・学力、優れた創造性、課題への傾倒が重要な構成概念になっている。心理学領域ではGagnéの才能分化モデル（Differentiated Model of Giftedness and Talent, DMGT, Gagné, 2005）がある。DMGTは、知性、想像性、社会情動性、感覚運動性の領域における先天的能力（giftedness）が環境や機会を受けることで学業や芸術、ビジネス、社会運動、スポーツ等の体系的に開発された技能（talent）に発達するという考え方を示している。

才能のある子どもの特別な教育的ニーズや心理学的ニーズに対応するため、National Association for Gifted Children（NAGC, 全米小児Gifted協会）は現実的な立場から次のように定義している。giftednessやtalents等才能のある子どもは、「同年齢・同経験・同環境の子どもと比較した場合に、1つまたは複数の分野において高い水準で課題を遂行する（遂行できる可能性をもつ）」と定義される（NAGC, 2019）。才能のある子どもが特別な教育プログラムを受ける判定基準はアメリカでは州毎に異なるが、NAGCの定義の通り、学業成績等の客観的な成果物と知能検査の結果等のパフォーマンスによって判断される場合が多い。本研究ではNAGCの定義を用いて検討を進める。また現在の日本では学業成績等を用いてgiftednessを判定する基準設定が困難であるため、特にWISCやWAIS等の知能検査の結果からgiftednessがあると推定される子どもや大人を想定し、知的ギフテッド（Intellectual Gifted）として限定して取り扱うものとする。

**知的ギフテッドの社会情動面の特徴** NAGCはgiftednessのある子どもの社会情動面について、知的発達と比べ社会情動面の発達が遅れている可能性があることを指摘している（NAGC, 2019）。そして、NAGCはgiftednessのある子どもの一部には、教師や保護者によって感情調整や社会的スキル、モチベーションの制御、自己認識等の発達を促し、総合的な発達と自己実現を図るニーズがあるとしている。知的ギフテッドの社会情動面に関する特徴は、学校生活では簡単な問題や単純な繰り返しの反復練習等の退屈の問題から、教科書を開かない等の授業に参加しない態度、白昼夢や空想に浸る、意図的な反抗や教師から反抗的に見える態度を示す等が生じる場合があり、教師からの叱責と矯正に対し強い失望を示す事例が見られる（松本・是永, 2015b）。そして、子どもの不安や感情の起伏の激しさ、学校等の規律に対する不適応といった形で顕在化し、保護者の子どもの理解に対する確信の持てなさや子育てに関する困り感・疲労感につながる（日高, 2019）。

知能発達に関する心理学研究でも、知的ギフテッドの性格について同様の知見が報告されている。伊藤（1990）は、“とくに幼児期から児童期にかけて、知能が著しく発達する子どもの性格特徴は、「自立的で、競争心が強く、高い攻撃性を示し、成功や完成への達成動機が高い」（pp.144）」と指摘している。伊藤はさらに、知能や創造性に優れた人に共通して、“たんにいまある生活事態に満足しているのではなく、「自

己実現へ志向しつつ生きている」という姿勢を内包した性格 (pp145)”が見られ、「自己実現を志向しつつ生きる人」は刺激の少ない、均衡のとれた状態に安住することを嫌い、・・・自力で切り抜けていこうとする (pp. 145)”結果、時には優れた認知機能が空回りしたり、精神的に衰弱したりとしている。伊藤の記述は、現在支援を必要とする知的ギフテッドのある子どもの特徴や保護者が感じる困り感と一致している。

**知的ギフテッドと Overexcitability (OE)** 知的ギフテッドの性格に関する伊藤の考察は、ポーランドの精神科医で心理学者の Kazimierz Dąbrowski (カジミエシュ・ドンブロフスキ) が唱えた Overexcitability<sup>1</sup> (OE, 過度激動, 超活動性, 過興奮性) の概念と一致する。OE は Dąbrowski が才能や創造性を発揮する著名人等の臨床観察から導いた人格発達理論 Theory of Positive Disintegration (TPD: 積極的分離理論) で扱った概念である (Dąbrowski, 1964; Piechowski & Cunningham, 1985)。

OE は intensity (刺激に対する強い反応) や sensitivity (刺激に対する感受性の高さ) と表現される知的ギフテッドの特性の 1 つで, Psychomotor OE (精神運動性 OE), Sensual OE (感覚性 OE), Imaginational OE (想像性 OE), Intellectual OE (知性 OE), Emotional OE (情動性 OE) の 5 領域からなる。全ての知的ギフテッドが OE を持つわけではないが, 1 つあるいは複数の強い OE を示す場合が多く, 知的ギフテッドの特別な教育的ニーズを満たす教育プログラムを受講する子どもは平均的集団の子どもと比べて OE を持つことが多い (Lind, 2001)。そして, ある分野に関する知識や創造的な活動, 日常生活について, OE を持たない子どもと比べ OE を持つ子どもは質的に異なる動機づけや熱中, 感情的な反応をもたらすとされ, 主に OE は知的ギフテッドにポジティブな影響を与える特性と考える必要があるとされている (Silverman, 2016)。その上で Lind は, その子どもが示す OE について本人の理解を深めるとともに, 家族や学級で共有し受け入れられる素地を作り, OE の長所を指摘し続けることの大切さを述べる一方, OE を持たない集団の中で OE を示す人が一緒に生活することは非常に困難であることも指摘している。OE の概要を Lind (2001) をもとに以下にまとめる (Table 1)。

知的ギフテッドの示す OE は臨床上で慎重に取り扱うべき特性として議論されている。Dąbrowski (1964)

Table 1. 5 つの Overexcitability 特性 (Lind, 2001より作成)

OE で説明される特徴	
Psychomotor OE (精神運動性 OE)	活動的でエネルギッシュな行動や性格 ・積極的に活動したり, 激しい運動を好んだり, 絶えず話したりしている。動くこと自体を目的とした運動も含む。
Sensual OE (感覚性 OE)	視覚, 聴覚, 嗅覚, 触覚, 味覚から生じる感覚に対する喜びや不快感の亢進を示す ・音楽, 言語, 芸術等の美的快感情が高く, 味覚, 嗅覚, 質感, 音, 光景から喜びを感じやすい。
Imaginational OE (想像性 OE)	イメージの鮮明さ, 連想の豊かさ, イメージや比喩の多用, 空想, 高度で複雑な想像力や発明を示す ・現実とフィクションを混ぜたり, 退屈のぎに空想上の仲間等を作ったりする。
Intellectual OE (知性 OE)	積極的に知識を獲得し, 見聞きしたものを分析的に捉え, 理解しようとする強い動機づけを示す ・自分の考えを持ち, 好奇心旺盛で鋭い観察力を持つ。自分が関心を持った問題について粘り強く, 長時間集中して取り組む。論理的思考を好み, 社会・道徳的問題に関心を持つこともある。
Emotional OE (情動性 OE)	感情の起伏や激しさの調整の難しさ, 他者の感情との同一化, 愛着や思いやり, 強い感情表現を示す ・人, 場所, 物に対して強い感情や愛着を示したり, 思いやり, 共感, 関係性, 責任感に対する感受性を示す。

<sup>1</sup> Overexcitability の日本語訳は現在一貫していない。古くから見かける訳語として過度激動がある。近年では訳の忠実性や理解のしやすさの観点から, 超活動性 (松村, 2018), 過興奮性 (Webb ら, 2019a, b) があるが, いずれも同じ概念を扱っている。本研究では訳語の揺れを無視するために OE と表記する。

はOEによる強い反応や興奮が、子ども自身や他者との間に葛藤を生み、時に苦悩や不安症、恐怖症といった問題に至る可能性を指摘する。知的ギフテッドと関連する知性OEは、時に些細な日常生活の問題や疑問を過度に発見したり、合理的に分析しようとしたりするあまり、不適応になってしまうことがあるとしている。近年、MENSA会員を対象に行われた知的ギフテッドと精神的健康に関する調査でも、心理面に関するOEが反芻思考や不安を増幅し気分症や不安症リスクを高めたり、生理身体面に関するOEがコルチゾールやサイトカイン反応と関係しアレルギー症状や免疫に影響を与えたりすることが指摘されている(Karpinski et al., 2018, hyper brain/hyper body theory)。

またOEの行動表現型は、注意欠如多動症(Attention Deficit/Hyperactivity Disorder, ADHD)や自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder, ASD)等の神経発達症の特徴と類似している。従って、OEであるか、神経発達症の特徴であるか、OEと神経発達症の両方であるか、といった鑑別も慎重に行う必要がある(Webb et al., 2005, 2007; 松村, 2018b)。そのため知的ギフテッドの心理支援において、心理士が神経発達症や精神疾患の症状だけでなく、OEを取り扱いながらカウンセリングすることの重要性が訴えられている(Peterson, 2018)。日本でも、神経発達症は持っていないが、OEによって不適切な環境になじめず、能力を十分に発揮できない状態にある子どもを「不協和感のある才能児(gifted child with discordant feeling, GDF児)」と称し支援する実践例が報告されている(水野, 2018)。水野はOEを評価し、GDF児にOEに関する心理教育とポジティブな側面に捉え直すリフレーミングを行っている。

**Overexcitability (OE) の測定** OEを評価する試みはLysy & Piechowski (1983)のOverexcitability Questionnaire (OEQ)から始まった。OEQは21項目の自由回答式質問紙で、訓練された採点者が「エビデンスなし」から「OEの強度が高い」と判定した。その後、採点の簡便化等を目的に、Falk et al. (1999, 2016)がOEQ-II (Overexcitability Questionnaire-Two)を開発した。OEQ-IIは、Psychomotor OE (精神運動性OE)、Sensual OE (感覚性OE)、Imaginational OE (想像性OE)、Intellectual OE (知性OE)、Emotional OE (情動性OE)の5因子構造の心理尺度で、各因子10項目計50項目で構成されている。OEQ-IIは才能教育を実施する国で翻訳されており、中国(香港: Siu, 2010; 台湾: Chang, 2001; Chang & Kuo, 2009)、フランス(Botella et al., 2015)、スペイン(De Santayana Sanz, 2006)、トルコ(Yakmaci-Güzel, 2003; Yakmaci-Guzel & Akarsu, 2006)、韓国(Piirto et al., 2008)等で知的ギフテッド児者の特性理解に利用されている(Falk et al., 2008)。

Falkらは、アメリカとカナダに在住する852人(女性68%)からOEQ-IIの標準化データを得ている。852名の年齢は10歳から76歳の範囲であり、49%が17歳以下(高校生35%, 中学生22%, 大学生16%)であった。Falkらが集めた参加者のうち、65%がギフテッドやタレンティッド、オナーズプログラム等の優秀な学生を対象にした特別教育カリキュラムの受講者であった。FalkらのOEQ-IIの標準化データを下

Table 2. OEQ-II 標準化データの参加者数と記述統計量 (Falk et al., 1999より改変引用)

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	25%ile	50%ile	75%ile
Psychomotor OE (精神運動性OE)	875	1.20	5.00	3.35	.79	-.11	2.80	3.40	3.90
Sensual OE (感覚性OE)	876	1.10	5.00	3.28	.87	-.06	2.60	3.30	4.00
Imaginational OE (想像性OE)	876	1.00	5.00	2.86	.83	.19	2.30	2.80	3.50
Intellectual OE (知性OE)	872	1.30	5.00	3.50	.79	-.15	2.80	3.40	4.00
Emotional OE (情動性OE)	879	1.30	5.00	3.72	.77	-.45	3.20	3.80	4.30

記に示す (Table 2)。5 因子の得点は、逆転項目の処理を行った上で10項目の平均点として算出されている。5 因子のなかで想像性 OE の平均値が最も低く、情動性 OE の平均値が最も高い結果となっている。また歪度はいずれの因子も  $\pm 0.5$  未満であり、全ての因子で正規分布に近いと考えられる。

知的ギフテッド群と非知的ギフテッド群の OEQ-II を比較した研究では、知性 OE が知的ギフテッド群で高いことが一貫して示されている (Bouchet & Falk, 2001; Tieso, 2007)。複数の OEQ-II を用いた研究をメタ分析した結果、非知的ギフテッド群と比較し知的ギフテッド群では、知性 OE と想像性 OE では中程度の効果量が、情動性 OE と感覚性 OE では小程度の効果量が認められている (Winkler & Voight, 2016)。

**本研究の目的** これまでの先行研究で示されたように、知的ギフテッドの特性を理解し、教育上の配慮や心理臨床上の支援を行う上で OE を理解することは重要である。そして OE を定量的にアセスメントすることは臨床上有用であると考えられる。しかしながら、日本では OE のアセスメントについて未だ研究されていない。そのような中で学校生活や日常生活で不適応になっている知的ギフテッドやその保護者、GDF 児の支援において OE に関して取り扱うことは喫緊の課題と考えられる。しかし、OE の概念研究や定量的評価に関する研究がされないまま臨床現場に援用されることは、OE に関する誤解や評価基準のゆらぎを招く可能性がある。そこで本研究は OEQ-II 日本語版の試作を行い、OE の測定可能性を検討した。また非知的ギフテッドと仮定した一般大学生を対象に、OE の定型発達データを得ることを目的とした。

## Ⅱ. 方 法

**調査期間** 本研究は2018年10月～2020年1月までの期間に実施された。

**研究倫理** 本研究は、筆頭著者の所属大学において研究倫理審査委員会の承認を得て行われた (佐賀大学教育学部倫理審査委員会 SGED0002, 作新学院大学研究倫理審査委員会 #2017-4)。

**参加者** 関東地方 A 大学、中部地方 B 大学、九州地方 C 大学の大学生150名 (女性93名、男性55名、無回答2名) を対象に行った。参加者の平均年齢は  $19.86 \pm 2.46$  歳 (女性  $19.63 \pm 2.89$  歳、男性  $20.20 \pm 1.47$  歳、無回答  $21.00 \pm 1.41$  歳) であった。本研究は予備的検討であったため、参加者の知的水準や精神的健康、疾患の有無に関する情報は収集しなかった。

**質問紙** フェイスシートで性別と年齢に関する情報を収集し、その後以下の質問紙への回答を求めた。

(1) Overexcitability Questionnaire-Two 日本語版 (OEQ-II) : OEQ-II は Falk et al. (1999) が開発した OE を評価する心理尺度である。OEQ-II の日本で標準化されたものがないため、本研究では筆頭著者が翻訳したものをを用いた<sup>2</sup>。OEQ-II は 5 因子構造で、各因子10項目計50項目の質問から構成される。OEQ-II の 5 つの因子の尺度得点は、逆転項目の処理を行った上で各10項目の平均値として算出した。

**手続き** 参加者にインフォームドコンセントを行い、回答の如何に関わらず不利益がないことを十分に説明した上で、上述の質問紙の回答を求めた。質問紙の呈示と回答は Google Form を用いて行った。

**分析** データの分析には JASP ver. 13.1を用いた (JASP Team, 2020)。

## Ⅲ. 結 果

**OEQ-II 日本語版と原版の比較** Falk et al. (1999) に従い、逆転項目の処理を行い、各因子の尺度得点

<sup>2</sup> 現在、Falk 博士の許諾を得て、Falk et al. (2016) を元にした日本語版の開発作業を進めている。

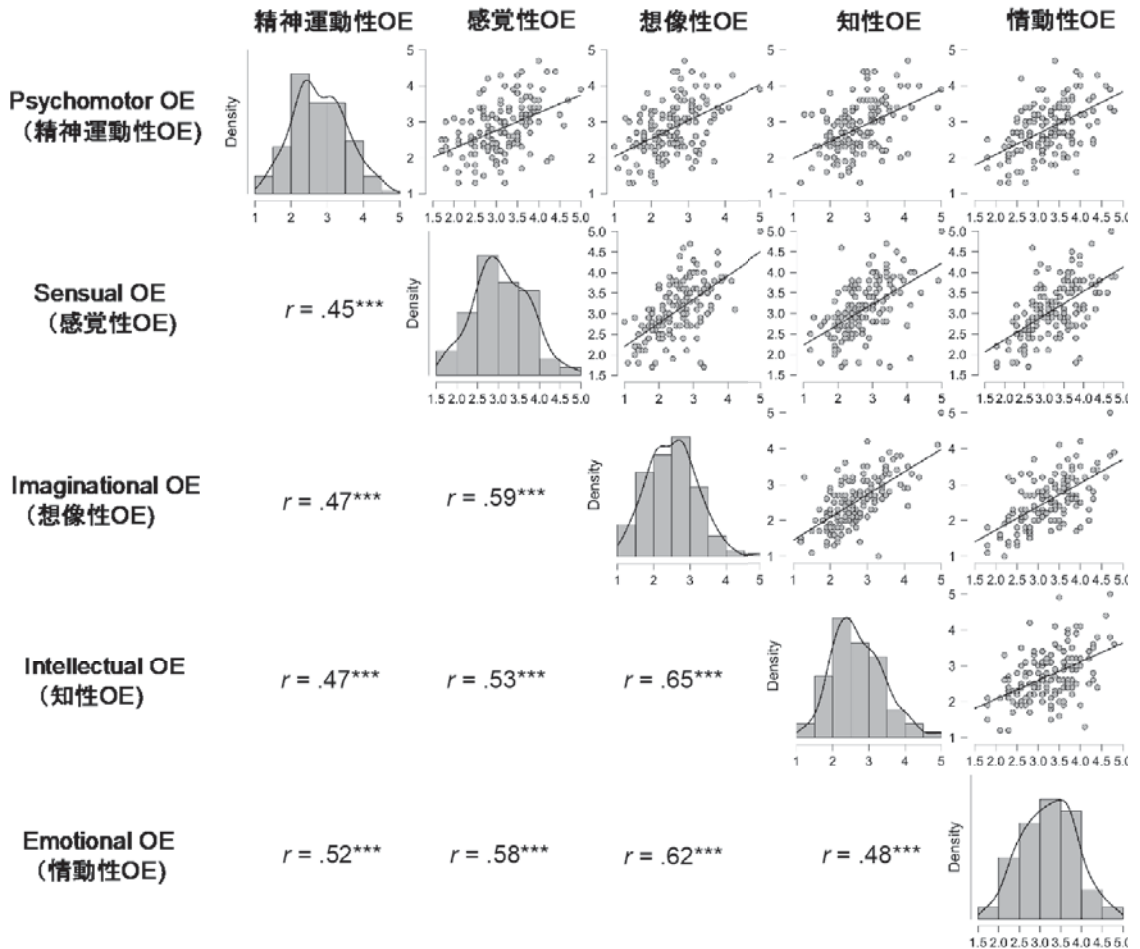
を求めた。結果を以下にまとめた (Table 3)。

5 因子の尺度得点全てにおいて, Falk らの標準化サンプルデータより低い結果となった。知性 OE の歪度が  $\pm .5$  を超えているため, 低得点の左方向にやや歪んだ分布をしていることが分かった。その他の 4 因子の歪度は標準化サンプルと同様にほぼ正規分布していることが分かった。また 5 因子の尺度得点を

Table 3. OEQ-II 日本語版の参加者数と 5 因子の尺度得点の記述統計量

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	25%ile	50%ile	75%ile
Psychomotor OE (精神運動性 OE)	150	1.30	4.70	2.80	.73	.22	2.30	2.70	3.30
Sensual OE (感覚性 OE)	150	1.70	5.00	3.08	.67	.16	2.70	3.00	3.60
Imaginational OE (想像性 OE)	150	1.00	5.00	2.53	.69	.35	2.00	2.55	2.98
Intellectual OE (知性 OE)	150	1.20	5.00	2.70	.71	.57	2.20	2.60	3.18
Emotional OE (情動性 OE)	150	1.80	4.80	3.22	.66	.03	2.73	3.20	3.70

Figure 1. OEQ-II 日本語版の 5 因子の尺度得点の散布図と相関関係



注)  $***p < .001$

Pearson の相関分析を行ったところ、全ての因子間で有意な中程度から大きな相関が認められた (Figure 1)。

本研究の結果を Falk et al. (1999) の標準化サンプルと比較するため、1 サンプルの  $t$  検定を行った (Table 4)。 $t$  検定の結果、5 因子全ての尺度得点において、Falk らの標準化サンプルのデータより本研究の結果は有意に低いことが示された。効果量に着目すると、知性 OE ( $t(149) = -13.68, p < .001, 95\% \text{ CI} [-.91, -.68], d = -1.12$ ), 情動性 OE ( $t(149) = -9.32, p < .001, 95\% \text{ CI} [-.60, -.39], d = -.76$ ), 精神運動性 OE ( $t(149) = -9.22, p < .001, 95\% \text{ CI} [-.67, -.43], d = -.75$ ) の3つに大きな効果が認められた。また想像性 OE に中程度の効果が認められ ( $t(149) = -5.87, p < .001, 95\% \text{ CI} [-.44, -.22], d = -.48$ ), 感覚性 OE に小程度の効果が認められた ( $t(149) = -3.68, p < .001, 95\% \text{ CI} [-.31, -.09], d = -.30$ )。

Table 4. OEQ-II 原版と日本語版の各尺度得点の比較

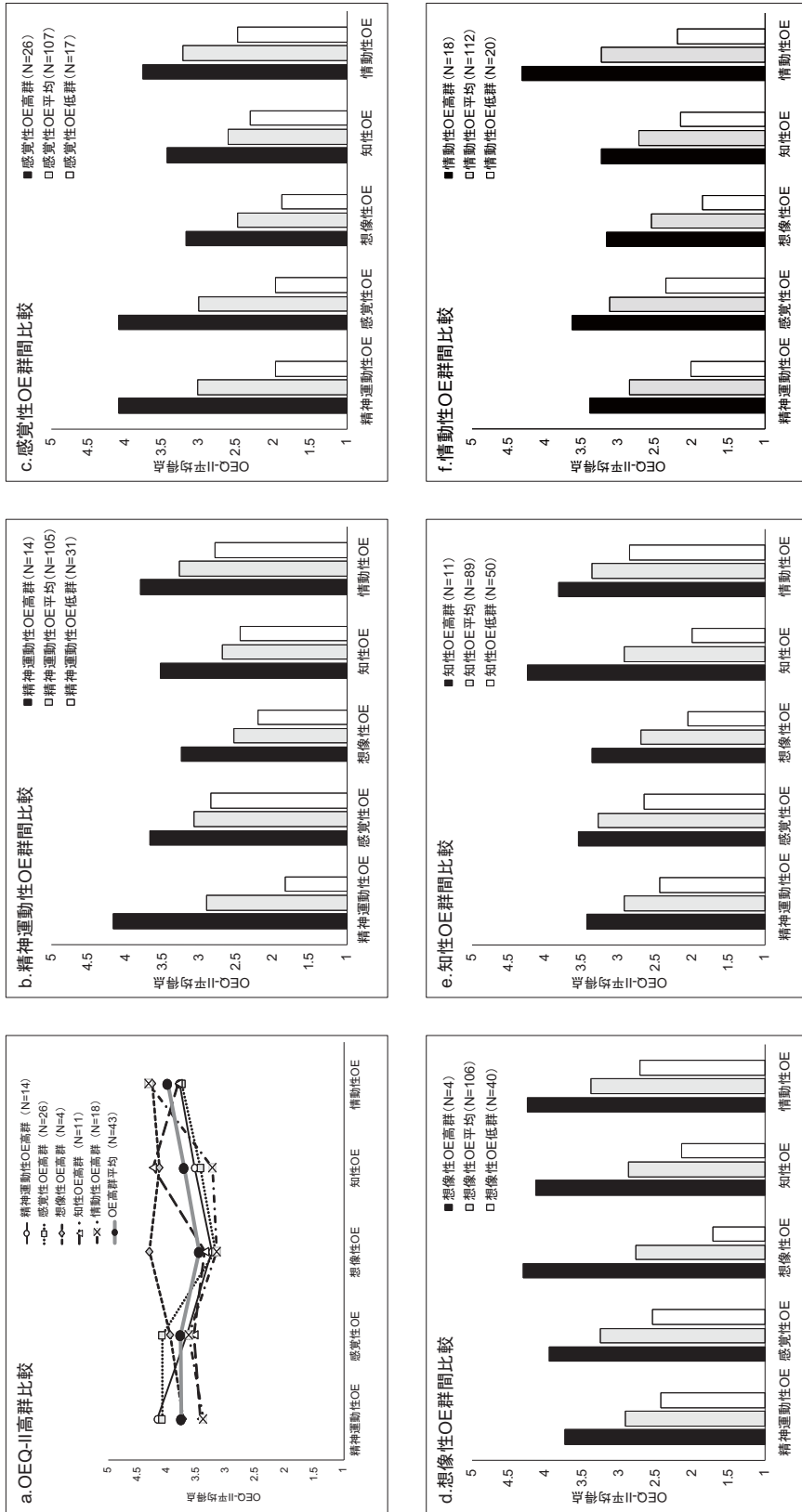
	本研究の結果	Falk et al. (1999)	$t$	$df$	$p$	95%CI		Cohen's $d$
						Lower	Upper	
Psychomotor OE (精神運動性 OE)	2.80 (.73)	3.35 (.79)	-9.22	149	<.001	-.67	-.43	-.75
Sensual OE (感覚性 OE)	3.08 (.67)	3.28 (.87)	-3.68	149	<.001	-.31	-.09	-.30
Imaginational OE (想像性 OE)	2.53 (.69)	2.86 (.83)	-5.87	149	<.001	-.44	-.22	-.48
Intellectual OE (知性 OE)	2.70 (.71)	3.50 (.79)	-13.68	149	<.001	-.91	-.68	-1.12
Emotional OE (情動性 OE)	3.22 (.66)	3.72 (.77)	-9.32	149	<.001	-.60	-.39	-.76

OEQ-II 日本語版の得点による群間比較 Falk et al. (2016) では OEQ-II の得点から OE の強さを 5 段階 (*Low - Low Average - Average - High Average - High*) で評価するようになった。そこで本研究のデータを Falk らの手続きに従い分類を行った。その際、分析を簡略化するために、Low Average, Average, High Average の 3 群を 1 つの平均群とまとめ、原版の Low を低群, High を高群とした。群間比較の結果を Figure 2 に示す。

各 OE の高群に位置した参加者は、精神運動性 OE 高群 14 名 (女性 7 名), 感覚性 OE 26 名 (女性 16 名, 未回答 1 名), 想像性 OE 4 名 (女性 1 名), 知性 OE 11 名 (女性 2 名), 情動性 OE 18 名 (女性 10 名) であった。また 5 つの領域全ての OE で高得点を記録した参加者は 1 名 (男性, 精神運動性 OE : 3.9 点, 感覚性 OE : 5.0 点, 想像性 OE : 5.0 点, 知性 OE : 5.0 点, 情動性 OE 5.0 点) であり、回答を分析した結果、回答内容は信用できると推定できるものであった。OE 高群の中で 4 領域高群 0 名, 3 領域高群 6 名 (女性 2 名), 2 領域高群 11 名 (女性 7 名), 1 領域高群 25 名 (女性 16 名, 未回答 1 名) であった。従って、1 領域以上で OE 高群に分類された参加者は 43 名 (女性 25 名) で、全参加者 150 名の 28.67% にあつた。各 OE の高群となった 43 名の平均得点は、精神運動性 OE 3.76 点 (*High Average*), 感覚性 OE 3.77 点 (*High*), 想像性 OE 3.45 点 (*High Average*), 知性 OE 3.71 点 (*High Average*), 情動性 OE 3.98 点 (*High*) であった。

各 OE の高群を比較すると、2 つの特徴が分かる (Fig. 3. a)。1 つめの特徴は、精神運動性 OE, 感覚性 OE, 知性 OE, 情動性 OE の 4 つの OE 高群は共通して想像性 OE が低いことが分かった。2 つめの特徴は、知的ギフテッドの特徴と考えられる知性 OE が高いのは、知性 OE 高群と想像性 OE 高群の 2 群だけであった。

Figure 2. 各OEの得点で分類した群間比較



注) 上左: a. 各OE高群の比較, 上中: b. 精神運動性OE群間比較, 上右: c. 感覚性OE群間比較, 下左: d. 想像性OE群間比較, 下中: e. 知性OE群間比較, 下右: f. 情動性OE群間比較

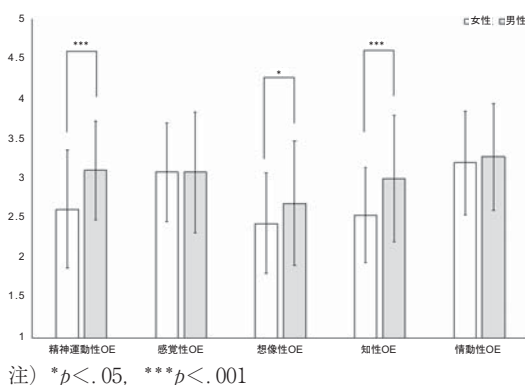


さらに OE 得点を従属変数に、各 OE のグループ（高群・平均・低群）要因で ANOVA を行った。その結果、各 OE グループの主効果が認められ、多くの部分で高群－平均、高群－低群、平均－低群に差が認められた。OE 高群の比較において、知性 OE が低い結果のように思われた精神運動性 OE 高群、感覚性 OE 高群、情動性 OE 高群の 3 群は、いずれも平均や低群よりも有意に高い結果を示した。

また群間で OE 得点に差が認められなかったところは以下の通りである。精神運動性 OE の群間比較では、感覚性 OE と知性 OE で平均－低群の間に差は認められなかった。感覚性 OE の群間比較では、知性 OE で平均－低群の間に差は認められなかった。想像性 OE の群間比較では、精神運動性 OE と感覚性 OE で高群－平均の間に差は認められなかった。知性 OE の群間比較では、精神運動性 OE、感覚性 OE、情動性 OE で高群－平均の間に差は認められなかった。なお、本研究では対象者の問題で高群が少なくサンプルの偏りが大きく、結果の参考にとどめる必要があるため、統計量は省略した。

**OEQ-II 日本語版と性差** 次に OEQ-II 日本語版の結果が性別によって違いが生じるかを検討した (Figure 3)。性別無回答の 2 名を除いた 148 名（女性 93 名、男性 55 名）を対象にした。等分散の仮定を満たすか  $F$  検定を行ったところ知性 OE の等分散性が棄却されたため、等分散を仮定しない Welch の  $t$  検定を行った。 $t$  検定の結果、精神運動性 OE ( $t(129.02) = -4.26, p < .001, 95\%CI [-.71, -.26], d = -.71$ )、想像性 OE ( $t(95.67) = -2.04, p = .044, 95\%CI [-.50, -.01], d = -.36$ ) と知性 OE ( $t(89.72) = -3.74, p < .001, 95\%CI [-.71, -.22], d = -.66$ ) に有意な違いが認められ、精神運動性 OE、想像性 OE、知性 OE の 3 因子は女性と比べ男性の方が高得点であることが分かった。

Figure 3. OEQ-II 日本語版の性別による尺度得点の違い



**OEQ-II 日本語版の主成分分析** 今回取得したデータから、主成分分析を行い、OEQ-II 日本語版の情報の圧縮を試みた。OEQ-II 日本語版では上述の通り OE 間での相関が見られているため、主成分分析においてプロマックス回転を行い、主成分数は平行分析を用いて決定した。また主成分負荷量が .400 未満の質問項目を除外し主成分分析を繰り返した。その結果、最終的に 5 つの成分が得られ、累積寄与率は 53.3% であった (Table 5)。

第 1 主成分は 11 項目から構成され、質問項目「私の心の中に描いているものはとても鮮やかで、私にとっては本当のようです」等、OEQ-II 原版の想像性 OE に当たる 9 項目が含まれていたため、第 1 成分は想像性 OE と考えられた。次の第 2 主成分は質問項目「難しい概念を理解したり、もっと理解しやすいよう言い換えたりできる」等、原版の知性 OE に当たる項目 9 項目であったため、第 2 成分は知性 OE と考えられた。同様に、第 3 成分は感覚性 OE、第 4 成分は精神運動性 OE、第 5 成分は情動性 OE と考えられた。

**OEQ-II 日本語版の因子構造** Kaiser-Meyer-Olkin のサンプリング適切基準の値が .851 で十分なサン

Table 5. 主成分分析で得られた OEQ-II 日本語版のパターン行列と相関行列

OEQ-II								OEQ-II							
No	日本語版	RC 1	RC 2	RC 3	RC 4	RC 5	共通性	No	日本語版	RC 1	RC 2	RC 3	RC 4	RC 5	共通性
質問項目								質問項目							
<i>RC 1. Imaginational OE</i> (想像性 OE)								<i>RC 3. Sensual OE</i> (感覚性 OE)							
1	Q. 22	.77	-.02	.20	.11	-.25	.66	21	Q. 48	-.27	.04	.83	-.01	.09	.63
2	Q. 4	.71	-.00	-.25	.17	.06	.52	22	Q. 37	-.09	-.09	.75	.09	.08	.54
3	Q. 14	.57	.02	.12	-.25	.18	.51	23	Q. 45	.24	.07	.70	.17	-.22	.69
4	Q. 20	.57	.39	-.39	.04	.12	.59	24	Q. 8	.18	.00	.60	-.08	-.06	.44
5	Q. 1	.55	-.00	.08	-.42	.13	.46	25	Q. 27	.13	-.16	.59	.12	.23	.57
6	Q. 32 <sup>a</sup>	.55	.05	.31	.23	-.18	.61	26	Q. 13	.32	.18	.52	.04	-.24	.56
7	Q. 29 <sup>b</sup>	.55	-.06	-.12	.47	.02	.56	27	Q. 46	-.04	-.07	.50	-.09	.18	.29
8	Q. 34	.53	.00	.34	.11	.02	.62	<i>RC 4. Psychomotor OE</i> (精神運動性 OE)							
9	Q. 47	.49	.33	-.04	-.07	.05	.48	28	Q. 10	.05	-.05	.13	.83	-.05	.72
10	Q. 33	.45	.02	.33	-.10	.06	.47	29	Q. 18	.15	.14	-.01	.77	-.08	.71
11	Q. 35 <sup>c</sup>	.44	-.18	.26	.10	.25	.50	30	Q. 15	.07	-.09	-.02	.76	.09	.62
<i>RC 2. Intellectual OE</i> (知性 OE)								31	Q. 42	.03	-.08	-.02	.64	.09	.62
12	Q. 23	.06	.79	-.14	-.03	.02	.59	32	Q. 7	-.08	-.12	.23	.53	.15	.39
13	Q. 12	-.19	.75	.15	.10	-.23	.56	33	Q. 2	-.33	.27	-.01	.51	.18	.42
14	Q. 5	-.08	.70	.10	-.02	.20	.62	34	Q. 50	.19	.20	.02	.50	-.05	.44
15	Q. 30	.28	.62	-.10	.03	.07	.61	<i>RC 5. Emotional OE</i> (情動性 OE)							
16	Q. 16	.10	.62	.07	-.08	.07	.51	35	Q. 9	-.08	.05	-.05	-.15	.74	.46
17	Q. 40	.13	.55	-.09	.06	.14	.44	36	Q. 31	.03	.06	.02	.03	.70	.57
18	Q. 25	.05	.52	.29	-.15	.05	.51	37	Q. 6	-.33	.24	.07	.18	.59	.48
19	Q. 19	.36	.50	-.18	.27	.00	.62	38	Q. 26	.17	-.06	.01	.21	.56	.52
20	Q. 36	.10	.43	.35	-.12	.03	.49	39	Q. 44	-.20	.48	.17	-.09	-.55	.44
								40	Q. 49	-.10	.21	.29	.02	.49	.53
								41	Q. 41	.13	.22	.10	-.17	.47	.45

注) 上付き英字付きの質問項目は原版の因子では a: 感覚性 OE, b: 精神運動性 OE, c: 情動性 OE であった。

	RC 1	RC 2	RC 3	RC 4	RC 5
	想像性 OE	知性 OE	感覚性 OE	精神運動性 OE	情動性 OE
<i>RC 1. Imaginational OE</i> (想像性 OE)	1				
<i>RC 2. Intellectual OE</i> (知性 OE)	.45	.1			
<i>RC 3. Sensual OE</i> (感覚性 OE)	.44	.42	1		
<i>RC 4. Psychomotor OE</i> (精神運動性 OE)	.23	.26	.18	1	
<i>RC 5. Emotional OE</i> (情動性 OE)	.43	.03	.38	.28	1

ル数があると判断できたため、OEQ-II 日本語版について因子分析を行い、OEQ-II 日本語版の因子構造の検討を行った。因子分析は、因子の推定を最尤法、因子軸の回転をプロマックス回転で行った。因子数は平行分析とスクリープロットに基づいて決定した。

まず原版と同じ因子数を5つに固定して行った検証的因子分析を行ったが、十分なモデル適合度は得られなかった ( $\chi^2(1117) = 2151.47$ ,  $p < .001$ , CFI = .70, TLI = .68, AIC = 19534.35, RMSEA = .079, GFI = .64)。

次に探索的因子分析を行った。因子負荷量が.400未満の質問項目や複数因子に重複する質問項目を除外し、探索的因子分析を繰り返した。その結果、最終的に以下の3因子構造が得られた (Table 6)。

第1因子は10項目から構成され、質問項目「私は問題を解決したり、新しい概念を発展させたりするこ

Table 6. 探索的因子分析で得られた OEQ-II 日本語版のパターン行列と因子間相関行列

OEQ-II 日本語版						OEQ-II 日本語版					
No	日本語版 質問項目	Factor 1	Factor 2	Factor 3	共通性	No	日本語版 質問項目	Factor 1	Factor 2	Factor 3	共通性
<i>Factor 1. Intellectual OE</i> (知性 OE), Cronbach's $\alpha = .88$						<i>Factor 3. Sensual OE</i> (感覚性 OE), Cronbach's $\alpha = .84$					
1	Q. 30	<b>0.80</b>	0.01	-0.06	0.21	19	Q. 48	-0.17	0.01	<b>0.78</b>	0.36
2	Q. 23	<b>0.77</b>	-0.07	-0.12	0.49	20	Q. 37	-0.14	0.10	<b>0.69</b>	0.50
3	Q. 19	<b>0.73</b>	0.23	-0.16	0.29	21	Q. 45	0.10	0.14	<b>0.65</b>	0.38
4	Q. 20 <sup>a</sup>	<b>0.67</b>	0.11	-0.23	0.36	22	Q. 27	-0.03	0.17	<b>0.63</b>	0.45
5	Q. 16	<b>0.66</b>	-0.10	0.10	0.74	23	Q. 8	0.08	-0.08	<b>0.58</b>	0.60
6	Q. 5	<b>0.62</b>	-0.03	0.16	0.29	24	Q. 46	-0.04	-0.07	<b>0.49</b>	0.44
7	Q. 40	<b>0.56</b>	0.06	0.03	0.47	25	Q. 13	0.31	-0.01	<b>0.48</b>	0.61
8	Q. 25	<b>0.55</b>	-0.21	0.34	0.57	26	Q. 34 <sup>b</sup>	0.26	0.16	<b>0.43</b>	0.40
9	Q. 12	<b>0.51</b>	0.00	0.06	0.46	注) 上付き英字付きの質問項目は原版の因子では a, b : 想像性 OE であった。					
10	Q. 36	<b>0.46</b>	-0.11	0.35	0.68						
<i>Factor 2. Psychomotor OE</i> (精神運動性 OE), Cronbach's $\alpha = .85$											
11	Q. 10	-0.13	<b>0.89</b>	0.06	0.21						
12	Q. 15	-0.10	<b>0.81</b>	-0.05	0.40						
13	Q. 18	0.17	<b>0.77</b>	-0.10	0.47						
14	Q. 42	-0.10	<b>0.64</b>	0.09	0.37						
15	Q. 7	-0.12	<b>0.51</b>	0.18	0.59						
16	Q. 29	0.25	<b>0.49</b>	-0.04	0.47						
17	Q. 50	0.19	<b>0.47</b>	0.04	0.50						
18	Q. 2	0.07	<b>0.44</b>	-0.06	0.48						

	Factor 1 知性 OE	Factor 2 精神運動性 OE	Factor 3 感覚性 OE
<i>Factor 1. Intellectual OE</i> (知性 OE)	1		
<i>Factor 2. Psychomotor OE</i> (精神運動性 OE)	.49	1	
<i>Factor 3. Sensual OE</i> (感覚性 OE)	.59	.38	1

とが大好きです」等、OEQ-II 原版の知性 OE に当たる 9 項目が含まれていた。そのため、第 1 因子を原版と同じく、知性 OE と命名した。第 2 因子は 8 項目から構成され、質問項目「私は動いていることが大好きです」等、原版の精神運動性 OE に当たる項目と一致していた。そのため、第 2 因子を原版と同じく、精神運動性 OE と命名した。第 3 因子は 8 項目から構成され、質問項目「私は自然の音を聴くことが大好きです」等、原版の感覚性 OE に当たる 7 項目が含まれていた。そのため、第 3 因子を原版と同じく、感覚性 OE と命名した。3 因子のクロンバックの  $\alpha$  係数はいずれも高く、内部一貫性が確認された (知性 OE :  $\alpha = .88$ , 精神運動性 OE :  $\alpha = .85$ , 感覚性 OE :  $\alpha = .84$ )。

しかし、探索的因子分析で得られた 3 因子構造のモデル適合度は十分と言えない結果であった ( $\chi^2(250) = 398.38, p < .001, RMSEA = .07$ )。探索的因子分析の結果を検証するため、検証的因子分析を行ったが、同様に十分なモデル適合度は得られなかった ( $\chi^2(347) = 725.24, p < .001, CFI = .79, TLI = .77, AIC = 11169.65$ )。

#### IV. 考 察

OEQ-II 日本語版と原版の比較 Falk et al. (1999) に基づき OEQ-II 日本語版を試作した。主に非知的

ギフテッドと推定される健常大学生を対象にデータを取得し、原版の手続きに従い5種類のOEの得点を算出した。その結果、知的ギフテッドを対象としたFalkらの原版と比較し、5つのOE全てで有意に低いことが分かった。OEQ-II日本語版のデータの歪みから考えても、得点の低い方向に分布が偏っており、非知的ギフテッド群でもOEを示す参加者がいる一方、知的ギフテッド群と比較すると低得点になると言える。

特に知性OE、情動性OE、精神運動性OEの3つは、原版と日本語版の比較において効果量も大きく、知的ギフテッド群と非知的ギフテッド群の差異が顕著になるOEであると考えられる。OEQ-IIに関する複数の研究をメタ解析したWinkler & Voight (2016)は、5つのOE全てで知的ギフテッド群は非知的ギフテッド群より高得点を示しており、特に知性OEで最も高い効果量を示したと報告している点は、本研究と一致している。

一方、本研究と異なり、Winklerらは精神運動性OEに群間で有意な差が認められなかったと報告している。OEQ-IIの精神運動性OEは競争心や熱意の強さ、身体的な活動の嗜好や欲求等で表現されており、学校や家でじっとしてられずADHDと誤診されやすいとする通説(Webb et al., 2005, 2019)を連想する質問項目もある。OEQ-II日本語版の開発を進める中で、知的ギフテッドと非知的ギフテッドの違いが精神運動性OEに見られ続けるのか、研究対象を拡大しながら慎重に検討する必要がある。

また原版と日本語版のデータで差が認められたものの感覚性OEの効果量は小さかった。Winklerらのメタ解析でも群間に感覚性OEの差の効果量は小さかったため、一貫した結果となっている。感覚性OEで効果量が小さくなる理由として、感覚性OEは環境からの感覚的な刺激を好意的に捉える質問項目が多いことが考えられる。OEQ-IIでは感覚性OEを身の回りの物や自然の見た目、音、触感や芸術鑑賞等を快に感じやすい傾向として評価している。知的ギフテッドか否かに関わらず回答者の嗜好性やどちらかという好むといった反応歪曲の影響が考えられ、知的ギフテッドと非知的ギフテッドの違いが小さくなる可能性がある。

**OEQ-II日本語版の得点によるOEの強さ分類** Falk et al. (2016)に従い、OEQ-II日本版で得られたOE得点に基づいて高群、平均、低群に分類した。その結果、各OEで高群に分類された参加者が43名、全参加者の28%であった。本研究では知的水準やスポーツ・芸術等のその他の才能について情報を収集していないため、この43名が知的ギフテッドやタレンティッドと識別される参加者かは判断できない。むしろ非ギフテッド群を対象にした研究で、約3割が1つ以上の領域でOE高群になった点は興味深い。上述の通り、OEはギフテッド児者のみが示す特徴というよりは、非ギフテッド児者からギフテッド児者までに連続する、刺激に対する反応の強さというスペクトラム概念と捉えた方が妥当かもしれない。

またOE高群の結果から、想像性OE高群を除き、他のOE高群は想像性OEの落ち込みが確認された。これは国際比較を行ったFalk et al. (2008)でも、アメリカ、スペイン、メキシコ、トルコでも確認されており、先行研究と一貫した結果であった。さらに全ての種類のOE高群において、群間比較では平均、低群と比べ高群の知性OEが高い結果であった。Falkらの国際比較でも、ギフテッド児者の知性OEの平均得点は3.48-3.61点の範囲にあり、本調査のOE高群の知性OEの結果と同様と考えられる結果であった。そして、グラフ上、知性OE高群と想像性OE高群を除く3群では知性OEが相対的に落ち込んでいるように見えた。想像性OEと知性OEの高いギフテッド児者は、この2つのOEが低いギフテッド児者と質的に違いがある可能性がある。今後、OEQ-IIの得点だけでなく、興味関心、客観的評価、精神状態、社会適応性、QOL等の観点から検討を進める必要がある。

**OEQ-II日本語版と性差,文化の問題** OEQ-II日本語版の結果について、性差の違いを検討したところ、精神運動性OE、想像性OE、知性OEの3因子は女性と比べ男性の方が高得点であることが分かった。

OEQ-II の性差を検討した先行研究では、知的ギフテッド群・非知的ギフテッド群によらず女性の方が男性と比べ情動性 OE と感覚性 OE が高いとする報告がある一方 (Bouchet & Falk, 2001; Tieso, 2007)、香港を対象にした調査では知的ギフテッド群・非知的ギフテッド群によらず女性の情動性 OE が高く、男性の知性 OE が高いという知見もあり一貫していない (Siu, 2010)。Miller et al. (1994) は OE の性差について、文化社会的に伝統的な男性役割・女性役割の影響がある知性 OE と情動性 OE に見られやすいとし、実際の性別よりも男性性・女性性と OE が強く正の相関を示すことを明らかにしている (Miller & Falk, 2009)。従って、日本においても OE の自己評価は日本における伝統的な男性女性の性役割の影響を受けた結果になりやすいと考えられる。従って、OEQ-II の結果から、性別による OE の特徴的パターンというものを発見し、知的ギフテッドの判定に使うことはできないと考えられる。

また近年、ASD の女性当事者によって ASD 特性のマスクングの問題が報告されている (Russo, 2018)。知的ギフテッドも同様のことが指摘されており、能力の高い女子児童や女子生徒はその能力を利用して学校集団に溶け込もうとすることが多い (Silverman & Miller, 2009)。Silverman (2011) は能力の高い女性、特に児童期・思春期の女子児童女子生徒は、友人関係や異性関係から能力や興味関心を隠すようになり、自尊心と学力が低下することが多く、自身の能力や関心と一般的な学校での友人関係の構築の選択を迫られるとする。従って、思春期・青年期の女性知的ギフテッドにおいては、社会的望ましさの影響を受けることで、OE の評価をすることが困難になる可能性をもつと考えられる。

**OEQ-II 日本語版の 5 つの主成分** OEQ-II 日本語版の主成分分析した結果、ほぼ原版と同様の質問項目構成で、5 つの主成分が得られた。このことは OEQ-II 日本語版で測定されたデータを要約した際に、原版と同様の手続きを行い OE の得点化を行うことの問題の少なさを示していると考えられる。

また主成分分析では、元のデータ情報の損失を少なくした説明力の高い第 1 主成分が得られ、第 2 主成分以下は既に得られた主成分とは無相関となるため、相関の高いデータでは第 1 主成分が尺度を総合するようなものが得られる (竹内・水元, 2014)。そのため、OEQ-II 日本語版で得られた第 1 主成分は今回のデータを要約した際の全体像を理解することに役立つと考えられる。本研究で第 1 主成分となったものは原版の想像性 OE にあたるものであった。従って、本研究で得られた非知的ギフテッド群のデータに限定されるものの、想像性 OE の得点が OEQ-II の得点を代表できると考えられる。

OEQ-II で評価する想像性 OE は現実には起きていない物事の空想、音や言葉、擬人化のイメージ等に関するものであり、課題非関連なマインドワンダリングや白昼夢傾向と言えるものである。様々な議論はあるが、想像、マインドワンダリング、白昼夢は創造性と関連するとする研究者も多い (Woolley et al., 2020)。ふり遊びが創造的活動に影響する事を示した実験的検討もある (Silverman, 2016)。このように想像性 OE が創造性と関連すると考えた場合、OE は Renzulli の三輪概念モデルと相性の良い理論である可能性がある。

**OEQ-II 日本語版の因子構造** 本研究で得られたデータを用いて原版と同じ 5 因子構造での検証的因子分析を行ったが、OEQ-II 日本語版は十分なモデル適合度は得られなかった。また探索的因子分析から OEQ-II 日本語版の知性 OE、精神運動性 OE、感覚性 OE の 3 因子構造となった。各因子の  $\alpha$  係数は、84 以上であり、因子内の信頼性も非常に高い結果であった。各因子の信頼性の高さは先行研究とも一致し (Warne, 2011)、この 3 因子については、試作段階の OEQ-II 日本語版でも十分に安定していると考えられる。しかし、原版にあった想像性 OE、情動性 OE が削除されてしまった。

各国の翻訳状況を見ると、因子分析が行われていない国もあるが (韓国版, Piirto et al., 2008)、中国版 (Siu, 2010)、フランス版 (Botella et al., 2015) では原版と同じ 5 因子構造での検証的因子分析を行っていた。中国版ではモデル全体の適合は  $\chi^2$  検定によってモデルは棄却されてしまったが、他の適合度指標

から中程度の適合が確認された (RMSEA = .05, GFI = .93, CFI = .89)。フランス版では5因子の独立モデルと相関モデルを比較し, Falk らと同様に5因子相関モデルの適合が良いことが確認された (RMSEA = .04, CFI = .88, AIC = 54092.7)。

本研究で先行研究のように十分なモデル適合度が得られなかった理由として2つ挙げられる。1つは本研究の対象者を非知的ギフテッド群としたことで, OE の特定因子の測定ができなかったことが考えられる。また2点目として OEQ-II 日本語の試作段階として作成した質問項目を用いたため, 日本語としての理解のしにくさが考えられた。質問意図が抽象的であったり, 回答者が想像しにくかったりする質問項目があった点は否定できない。本研究の結果を踏まえて質問項目の修正を行い, 調査を継続する必要があると考えられる。

## V. 展 望

本研究では OEQ-II の測定概念を検証し, 心理尺度による OE の評価可能性を検討することを主な目的とした。その結果, 原版と同じ手続きを踏まえた場合, ① OEQ-II 日本語版でも原版と同様に5つの OE を評価可能であること, ② 知的ギフテッドと比べ低得点ながら非知的ギフテッドも OE を持つことが示された。また主成分分析の結果から③ OEQ-II 日本語版による OE の評価は想像性 OE に代表される可能性があることが分かった。そして因子分析の結果, ④ 非知的ギフテッドを対象にした OEQ-II 日本語版の調査では知性 OE, 精神運動性 OE, 感覚性 OE の3因子が安定して維持されることが分かった。

一方, 因子分析の結果から, OEQ-II 原版や各国の翻訳版と異なり, OEQ-II 日本語版は5因子モデルが得られず, また得られた3因子モデルでもモデル適合度にも課題が残った。これから原文への忠実性を保ちながら, 質問項目の日本語訳としての適切性を改善するとともに, 知的ギフテッド児者を対象にした研究を行い, OEQ-II 日本語版の心理尺度としての信頼性と妥当性を検証する必要がある。なお現在, OEQ-II 日本語版の完成に向けて, OEQ-II の作成者である Falk 博士の許諾を得て, シングルバックトランスレーション法を用いた検証を行っている。

また本研究の限界は, OEQ-II 日本語版の予備調査として, 研究参加者を通常の大学生に限定した点である。大学生の中に知的ギフテッド者が含まれる可能性はあるものの, その多くは平均的な知的水準の参加者であったと予想される。ウェクスラー式知能検査等で知的水準を特定した知的ギフテッド群と非知的ギフテッド群を対象に比較研究を進めることで, 日本における知的ギフテッドの OE の特徴が明らかになると考えられる。また OEQ-II を用いた研究では, IQ ではなく, STEM 教育に特化したプログラムを受ける児童生徒等 (Imburgia et al., 2012), 受ける教育課程を用いて giftedness を判断しているものが多い。日本においても STEM 教育や美術・音楽等の芸術教育, アスリート等, 何らかの1つの分野に突出した成果と傾倒を示す児童生徒を対象にした検討を行うことは, スクールカウンセリングや教育相談分野において有用と考えられる。

そして OEQ-II 日本語版を臨床に活用するためには, 知的ギフテッドと誤診されやすい ADHD や ASD 等の神経発達症の特性との関係性を検討する必要がある。OE と神経発達症特性の理解が進むことで, 知的ギフテッドの OE 特性, 2E, そして誤診の問題を解決する知見が得られると考えられる。また OE は神経発達症の他に, Big Five の開放性 (Vuyk et al., 2016) や不安症 (Botella et al., 2015) との関係性を示唆する知見もあり, 性格心理学や精神疾患の知見との統合を試みることも有用と考えられる。

最後に今回用いた OEQ-II はシリーズとして, OEQ-II parent (保護者評定版) と OEQ-II children (児童版) が出版されている。知的ギフテッド児の療育や保護者のカウンセリングを通じて, 特に幼児期から

小学校期にかけて、子育てや学校生活での困り感が増大する（日高，2018）。そのため、知的ギフテッド児や保護者の支援に活用できる保護者評定版や児童版の開発も急務と考えられる。

#### 付記・助成

日本学術振興会科学研究費助成事業科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号19K02935，研究代表者：日高茂暢，「高い知能をもつ人が示す過度激動特性（刺激への感受性の強さ）に関する尺度開発」）の助成を受けた。また本研究は関わる知的ギフテッドのある保護者と子ども達の協力があって推進することができました。この場を借りて、関係の方々に感謝いたします。

#### 引用文献

- Botella, M., Fürst, G., Myszkowski, N., Storme, M., Costa, M. P. D., & Luminet, O. (2015). French Validation of the Overexcitability Questionnaire 2: Psychometric Properties and Factorial Structure. *Journal of Personality Assessment*, 97(2), 209-220.
- Bouchet, N., & Falk, F., R. (2001). The Relationship Among Giftedness, Gender, and Overexcitability. *Gifted Child Quarterly*, 45(4), 260-267.
- Chang, H. J. (2001). *A research on the overexcitabilities of gifted and talented students in Taiwan* [Master's thesis]. Department of Special Education. National Taiwan Normal University.
- Chang, H. J., & Kuo, C. C. (2009). Overexcitabilities of Gifted and Talented Students and Its Related Researches in Taiwan. *Asia-Pacific Journal of Gifted and Talented Education*, 1(1), 41-74.
- Dąbrowski, K. (1964). Positive Disintegration and Child Development. *Positive Disintegration* (pp. 75-81). William Tillier, M. Sc.
- De Santayana Sanz, R. P. (2006). *El alumno superdotado y sus problemas de aprendizaje validación del OEQ-II como prueba de diagnóstico* [Doctor's thesis]. UNIVERSIDAD COMPLUTENSE DE MADRID.
- Falk, F., R., Lind, S., Miller, N., B., Piechowski, M., M., & Silverman, L., K. (1999). *The Overexcitability Questionnaire-Two (OEQII): Manual, Scoring System, and Questionnaire*. Institute for the Study of Advanced Development.
- Falk, F., R., Miller, N., B., Piechowski, M., M., & Silverman, L., K. (2016). *The Overexcitability Questionnaire-Two (OEQII): Manual, Scoring System, and Questionnaire*. (2nd 版). Institute for the Study of Advanced Development.
- Falk, F., R., Yakmaci-Guzel, B., Chang, A. (Hsin-J., Sanz, R. P. de S., & Chavez-Eakle, R. A. (2008). Measuring Overexcitability: Replication across Five Countries. S. Ph. D. Mendaglio, *Dabrowski's Theory Of Positive Disintegration* (pp. 183-199). Great Potential Pr Inc.
- Gagné, F. (2005). From Gifts to Talents: The DMGT as a Developmental Model. R. J. Sternberg & J. E. Davidson, *Conceptions of Giftedness* (2nd 版, pp. 98-119). Cambridge University Press.
- 日高茂暢. (2018). 知的ギフテッドの子どもにおける特別なニーズと支援：「適応的な行動の評価から知的ギフテッドのある子どもと保護者の困り感を考える」. *日本発達心理学会第29回大会発表論文集*, AS4.
- 日高茂暢. (2019). 知的ギフテッドのある子どもを育てる保護者のカウンセリング・ニーズの検討－知的ギフテッド児 9 例に行った心理的援助の質的分析から－. *日本LD学会第2回研究集会発表論文集*, PA23-24.
- Imburgia, T., McGrath, D., & Kolar, C. G. (2012). *Comparing Overexcitability Levels between STEM Talented Students and Generally Gifted Students Using the OEQII*. Paper presented at the meeting of the Dabrowski Conference, Denver.
- 伊藤隆二. (1990). III 部 知能と性格について. *伊藤隆二著作集 知能の心理と創造性教育* (Vol. 1). 岩崎学術出版.
- JASP Team. (2020). *JASP (Version 0.13.1) [Computer software]*. <https://jasp-stats.org/download/>
- 小泉雅彦. (2014). 読み書き困難を持つ知的ギフテッドの支援. *子ども発達臨床研究*, 6, 131-136.
- 小泉雅彦. (2016). 認知機能にアンバランスを抱える子どもの「生きづらさ」と教育：WISC-IVで高い一般知的能力指標を示す知的ギフテッド群. *北海道大学大学院教育学研究院紀要*, 124, 145-151.
- Lind, S. (2011). Overexcitability and the gifted. *The SENG Newsletter*, 1(1), 3-6.
- Lysy, K. Z., & Piechowski, M. M. (1983). Personal growth: An empirical study using Jungian and Dabrowskian measures. *Genetic Psychology Monographs*, 108(2), 267-320.
- 松村暢隆. (2007). 才能のある学習困難児のための教育プログラム：2E教育の基礎固めのために. *關西大學文學論集*, 57(3), 97-113.
- 松村暢隆. (2018a). *2E教育の理解と実践：発達障害児の才能を活かす*. 金子書房.
- 松村暢隆. (2018b). 発達多様性に於けるアメリカの2E教育：ギフテッド（才能児）の発達障害と超活動性. *關西大學文學*

論集, 68(3), 1-30.

- 松本茉莉衣, & 是永かな子. (2015a). 日本におけるギフテッド教育の歴史的展開—先行研究検討から—. 高知大学学術研究報告, 64, 51-59.
- 松本茉莉衣, & 是永かな子. (2015b). ギフテッドの情緒社会面・行動面・感覚面における特別なニーズと対応. 高知大学教育学部研究報告 = *Bulletin of the Faculty of Education, Kochi University*, 75, 169-178.
- Miller, N. B., & Falk, F. R. (2009). Gender Identity and the Overexcitability Profiles of Gifted College Student. *Roeper Review* 31, 161-169.
- Miller, N. B., Silverman, L. K., & Falk, R. F. (1994). Emotional development, intellectual ability, and gender. *Journal for the Education of the Gifted*, 18(1), 20-38. <https://doi.org/10.1177/016235329401800103>
- National Association for Gifted Children. (2019). *A Definition of Giftedness that Guides Best Practice*. <https://www.nagc.org/resources-publications/resources/what-giftedness>  
<https://www.nagc.org/sites/default/files/Position%20Statement/Definition%20of%20Giftedness%20%282019%29.pdf>
- 水野晶葉. (2018). 2E当事者と親の意識・支援 [3] 不協和感のある才能児の自己理解と母親の共感を促す. 松村暢隆, 2E教育の理解と実践: 発達障害児の才能を活かす (pp. 122-131). 金子書房.
- Peterson, J. S. (2018). Counseling Gifted Children and Teens. S. I. Pfeiffer, E. Shaunessy-Dedrick, & M. Foley-Nicpon, *APA Handbook of Giftedness and Talent* (pp. 511-527). American Psychological Association.
- Piechowski, M., M., & Cunningham, K. (1985). Patterns of Overexcitability in a Group of Artists. *The Journal of Creative Behavior*, 19(3), 153-174.
- Piirto, J., Montgomery, D., & May, J. (2008). A comparison of Dabrowski's overexcitabilities by gender for American and Korean high school gifted students. *High Ability Studies*, 19(2), 141-153. <https://doi.org/10.1080/13598130802504080>
- Renzulli, Joseph. S., & Reis, S., M. (2018). The Three-Ring Conception of Giftedness: A Developmental Approach for Promoting Creative Productivity in Young People. S. I. Pfeiffer, E. Shaunessy-Dedrick, & M. Foley-Nicpon, *APA Handbook of Giftedness and Talent* (pp. 185-199). American Psychological Association.
- Russo, F. (2018, 2月 24). *The Struggles of Women Who Mask Their Autism*. The Atlantic. <https://spectrumnews.org/features/deep-dive/costs-camouflaging-autism/>
- Silverman, L. (2011, 9月 14). *Developmental Phases of Social Development*. SENG. <https://www.sengifted.org/post/developmental-phases-of-social-development>
- Silverman, L. (2016, 1月 12). *The Truth about Overexcitabilities*. gifted developmental center. <http://www.gifteddevelopment.com/blogs/bobbie-and-lindas-blog/truth-about-overexcitabilities>
- Silverman, L. K., & Miller, N. B. (2009). A Feminine Perspective of Giftedness. L. V. Shavinina (編), *International Handbook on Giftedness* (pp. 99-128). Springer Netherlands. [https://doi.org/10.1007/978-1-4020-6162-2\\_5](https://doi.org/10.1007/978-1-4020-6162-2_5)
- Siu, A. F. Y. (2010). Comparing Overexcitabilities of Gifted and Non-Gifted School Children in Hong Kong: Does Culture Make a Difference? *Asia Pacific Journal of Education*, 30(1), 71-83.
- Sternberg, R. J. (2004). *Definitions and Conceptions of Giftedness*. Corwin Press.
- Sternberg, R. J. (2018). Theories of Intelligence. S. I. Pfeiffer, E. Shaunessy-Dedrick, & M. Foley-Nicpon, *APA Handbook of Giftedness and Talent* (pp. 145-161). American Psychological Association.
- 竹内理・水元篤. (2014). 外国語教育研究ハンドブック改訂版—研究手法のより良い理解のために. 松柏社.
- Tieso, C. L. (2007). Overexcitabilities: A New Way to Think About Talent? *Roeper Review*, 29(4), 232-239.
- Vuyk, M. A., Krieshok, T. S., & Kerr, B. A. (2016). Openness to Experience Rather Than Overexcitabilities: Call It Like It Is. *Gifted Child Quarterly*, 60(3), 192-211. <https://doi.org/10.1177/0016986216645407>
- Warne, R. T. (2011). A Reliability Generalization of the Overexcitability Questionnaire-Two. *Journal of Advanced Academics*, 22(5), 671-692.
- Webb, J., T., Amend, E., R., Beljan, P., Webb, N., E., Kuzuhankis, M., Olenchak, R., F., & Goerss, J. (2019). ギフテッドその誤診と重複診断: 心理・医療・教育の現場から (角谷詩織&榊原洋一, 翻訳者). 北大路書房.
- Webb, J., T., Amend, E., R., Webb, N., E., Goerss, J., Beljan, P., & Olenchak, R., F. (2005). Intensity/Sensitivity/Overexcitabilities. *Misdiagnosis and Dual Diagnoses of Gifted Children and Adults: ADHD, Bipolar, OCD, Depression and Other Disorders* (pp. 10-16). Great Potential Press, Inc.



- Webb, J., T., Gore, J., L., Amend, E., R., & Devries, A., R. (2007). Characteristics of Gifted Children. *A parent's Guide to Gifted Children* (pp. 11-29). Great Potential Press, Inc.
- Webb, J., T., Gore, J., L., Amend, E., R., & Devries, A., R. (2019). わが子がギフティッドかもしれないと思ったら：問題解決と飛躍のための実践的ガイド（角谷詩織，翻訳者）. 春秋社.
- Winkler, D., & Voight, A. (2016). Giftedness and Overexcitability: Investigating the Relationship Using Meta-Analysis. *Gifted Child Quarterly*, 60(4), 243-257. <https://doi.org/10.1177/0016986216657588>
- Woolley, J. D., Bunce, L., & Boerger, E. A. (2020). Relation between imagination and creativity. D. D. Preiss, D. Cosmelli, & J. C. Kaufman, *Creativity and the Wandering Mind: Spontaneous and Controlled Cognition* (pp. 181-203). Academic Press.
- Yakmaci-Güzel, B. (2003). A comparison study about overexcitabilities of Turkish 10th Graders. *Proceedings of the 8th Conference of the European Council for High Ability (ECHA)*, 82-85.
- Yakmaci-Guzel, B., & Akarsu, F. (2006). Comparing overexcitabilities of gifted and non-gifted 10th grade students in Turkey. *High Ability Studies*, 17(1), 43-56.
- 山内乾史. (2012). 才能児教育について（概説）. 比較教育学研究, 45, 3-21.

---

### Summary

Individuals who show high intellectual ability (gifted children & adults) often exhibit Overexcitability (OE), which is a high sensitivity and strong response to stimuli. In this study, we developed a prototype of the Overexcitability Questionnaire-Two Japanese version (OEQ-IIj, original; Falk et al., 1999), a psychological scale to assess the OE of intellectually gifted individuals. In this study, we recruited 150 non-intellectually gifted university students. The OEQ-IIj showed correlations among all five factors, psychomotor OE, sensory OE, imaginative OE, intellectual OE and emotional OE. The OEQ-IIj (non-gifted data) showed significantly lower scores for all five factors than the original version (gifted data). Principal component analysis revealed that the information could be summarized into the same five components as in the original version. The results of exploratory factor analysis revealed a three-factor structure, namely, intellectual OE, psychomotor OE and sensory OE. The results of the present study indicated: (1) the OEQ-II Japanese version was able to evaluate the same five OEs as the original; (2) the non-gifted also showed OE, although with lower scores than the gifted; (3) the OE of the OEQ-II Japanese version may be represented by imaginative OE; and (4) intellectual OE, psychomotor OE, and sensory OE are stable in non-gifted group. The development of the OEQ-II Japanese version and the clarification of stereotyped responses to stimulus sensitivity will facilitate research and support for OE in the intellectually gifted.

**【key words】** Intellectually Gifted, Overexcitability (OE), Psychological Assessment Scale, Overexcitability Questionnaire-Two (OEQ-II)